

*ポレーシエとは、チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう

—チェルノブイリに思いをよせて—

ポレーシエ

現地で、六者会議開催！

昨年からスタートした菜の花プロジェクト（PJ）も、9月のバイオディーゼル燃料（BDF）試作成功で一段落。しかし、現地における規制の壁などにより、「BDF 建家改修費が膨れあがる」「バイオガス（BG）の見通しが立てにくい」といった問題も持ち上がっています。そこで、「PJに関わる六者が集まって仕切り直しをしよう。ついでは、課題山積のバイオ燃料（BDF・BG）PJに関する現地の責任者（マネージャー）を決めてもらおうではないか」ということになりました。

ポイントは二つ。第一は契約の中味。順調に経過している土壌浄化PJの場合、「農大に委託する」と、現地の責任主体が明文化されているのですが、BDF・BGに関しては明確ではありません。これが、現地における混乱の原因となっています。

第二は「ビジネス」との関わりです。このバイオ燃料PJは、土壌浄化PJで出てくる菜種バイオマスの安全な処理、地域のエネルギー自給といった目的があります。このPJにビジネスモデルの性格はなかったと思うのですが、幸か不幸か、国際的にバイオ燃料がビジネス面でも注目を集める時期と重なりました。ビジネスとしての可能性が出てくれば、期待（不安）も高まり、規制の壁も厚くなるでしょう。これも問題の一因になったと思います。

事前に、マネージャー就任を打診した方からは、明確な返答をもらえないまま「暗中模索」状態でウクライナに向かったのですが、「案ずるより産むがやすし」。一日目の、農大訪問とディードゥフ氏も加えたホステージ基金との懇談で、見通しが見えてきました。農大からは、ナロジチにおけるPJ関連施設の管理を含めた全面協力が得られることとなり、ホ基金での懇談では、それを踏まえた六者契約の見直しの提案が出されたのです。

11月5日、ナロジチ行政長室における六者協議の場で、ナロジチ側からも「このPJを実験・研究とするなら、農大主導で進めることに同意する」との発言があり、来年2月をめどに、農大を中心として六者契約の見直しとバイオ燃料PJに関する個別契約の準備に取りかかる合意がなされました。今後、ディードゥフ氏（農大）主導で現地の体制が整うことが期待されます。（小牧崇）



<お別れ夕食会の後で(ジトミル消防署)>

〒466-0822 名古屋市長和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：小牧 崇

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073（月・水・金 10:00～17:00）

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

11月派遣ドキュメント

(神谷 俊尚)



<左から3人目が神谷さん>

派遣**7日目**(最終日)は、午前中ヘルシンキ大聖堂・元老院広場を見学し、ヘルシンキ港の人気スポット「マーケット広場」は冬支度で、数軒の魚屋・毛皮屋・毛糸品屋・土産、雑貨屋のテント、カモメも居らず寂しく寒く人影もまばらでした。スオメンリンナ島に渡り、寒い中、駆け足1時間で廻り、ウスペンスキ寺院を見学後オールドマーケットホールで昼食を摂り、帰国のため空港へ、今回の派遣で気兼ねなく楽しめた最後の1日でした。さて、滞在した日々を振り返ると...

- 1日目** 小牧・山本・私の派遣メンバーは、セントレアを定刻に飛び立ちました。今回は「**六者が集まり、当プロジェクトの今後の展開に必要な現地マネージャーの選任**」が主な目的です。日がとっぴり暮れたキエフ国際空港に定刻の到着、現地駐在員竹内さん・被災者団体「チェルノブイリの消防士たち」副代表クラブチェンコさんの出迎えを受け、消防署の車でジトーミルへ。到着後、会議に向け簡単な打合せ。
- 2日目** ホステージ基金で医療品支援金・奨学金・業務委託費の支出状況の説明を受け、キリチャンスキー氏は「**現在のプロジェクトに関し、マネージャーの必要性は理解するが、自分は体力的に厳しい。しかし会計管理はしっかり行う**」と明言。農業生態学大学では、学長・2人の副学長・ディードゥフ助教授と会談、学長から「**このプロジェクトは研究のみならず応用面も有るので関心を持っている。農大の管理下で、BDF&BGを進めていく事を了解する**」との発言があり、今後の方向性も明確になりました。
- 3日目** 寒風の中、ナロジチのナタネ畑で春・秋蒔き畑の生育状況を確認、肥料条件の違いで生育の差が見てとれる。BDF 設置の建屋工事・発電機保管状況の確認作業の後、遅い昼食時に、プロコペンコ氏より「**このプロジェクトの成功を、国の地域再生プログラムに乗せて行きたい。そのために、残り3年を農大の管理指導で進めて行くのもよい**」との発言があり、六者会議へ希望が湧いてきました。
- 4日目** ナロジチ行政長室で六者会議を開催。出席者は、日本側3名・竹内(通訳)・サヴルク(地区行政長)・プロコペンコ(地区副議長)・ネステルチュク(管理ステーション)・ディードゥフ(農大助教授)・キリチャンスキー(ホ基金)・書記ドンチェヴァ(ホ基金)。会議当初は、「地域開発・ビジネス面の強化だ」「実験・研究とすべきだ」等の議論が沸騰しましたが、**①当プロジェクトの成果を地区住民の利益に向け、将来は国の計画に乗せていく為に、農大の管理下で BDF の稼働を計り、製造されたディーゼル油は、栽培・スクールバス等に使っていく。②バイオガスは、来年度に法的調査を充分行い、ミニプラントを住民が実感できる場所に作る。③必要な契約変更・新規契約締結を2月に行い、4月新年度から実施する。この3点が確認できました。参加者全員が真剣にこのプロジェクトに向い合っている事が確認し合えた意義ある会議となりました。**夕食会のスピーチで、「案ずるより産むが易し」の諺を紹介すると、ウクライナの人達も「そうだな…」と言う顔をしてくれたのにはほっとしました。
- 5日目** 午前中、ホステージ基金で、ディードゥフ・キリチャンスキー・ドンチェヴァ3氏と会議を行い、日本側との今後の協議の手順、ナタネ栽培のウクライナの現状等を話し合い、全ての協議が終了しました。その後、ジトーミル市内繁華街を散策し、夕方5時から、チュマクさんも出席されて州消防局内食堂で恒例の「お別れ食事会」。今回もスピーチで「急がば回れ」の諺を話すと、親指をグーと突き出し笑顔を見せたキリチャンスキーさんが、非常に印象的でした。
- 6日目** 訪ウ中始めての晴天の中、消防署の車でキエフ国際空港まで送ってもらい、派遣中全行程を安全運転のコーリャさん、そして竹内さんと別れの固い握手。出国手続きは、予想外にスムーズに済み、ウクライナを後にしました。

ウクライナ同行記

(山本 梨恵)

代表団出発の一週間前、事務所では、急遽行けなくなった運営委員の代わりに「他に行ける人がいないか」と、ほぼ全メンバーに連絡を取ってあたふたしていた。そんな中、「私、行きましょうか??」なんて言ったことも忘れ、決算書の作成の為に会計ソフトと戦っていた。

そして一週間後の朝、私はセントレアに向かっていった。

1日目 ウクライナ・キエフに到着。

ものすごい早さでジトーミルに向かう車にドキドキしつつウトウト…目が覚めたら、ジトーミルのホテルに到着していた。ウクライナに来て初めて口にしていたのが、それから毎日のように食べたサーモンやハムが乗ったサンドウィッチ。とてもおいしかった!!

2日目 朝、私と同じくらいの女の人は皆、背が高くとても姿勢がいい。うらやましく思っているうちにホステージ基金へ。現地から届く連絡メールに書かれている色々な人の名前や場所が、少しずつわかって行く。現地で行われている寄付金の使い方を直接聞く事ができ、今後の会計報告にも力を入れて行かなければと感じた。

3日目 チェルノブイリ原発事故現場から 70 キロしか離れていないナロジチ地区にあるナタネ畑を視察した。土地管理ステーションのネステルチュクさんから話される、ナタネ畑の状況の話はもちろん大切だが、今まで学校の歴史の授業でしか習ってこなかったチェルノブイリ原発事故…汚染地区のために、廃村となった建物をただ呆然と見つめていた。とても穏やかできれいな場所なのにもう人は住めない。早く、22 年前のようにたくさんの人や家畜が住めて、安全な野菜を作れるような状態に戻したい。この活動の重要さを、身をもって感じる事ができた。

4日目 今回の派遣のメインである 6 者会議開催。出席者全員、稼働し始めた BDF 装置を今後どのように活用していけば、ナロジチ地区復興・地域住民のためになるのかを真剣に話し合っていた。ナロジチからジトーミルに向かう車の中で、「私にできることはなんだろう?」と考え、「現地で行っている活動を多くの日本人たちに知ってもらいたい」と強く思うようになった。

5日目 午後から、ジトーミル市内で「お小遣いの残金が 2 グリブナ (約 40 円)」という上手な買い物をして、再び同じ年代の女性を見てはうらやましく思い、消防局へ。最後の夜ご飯ということで、振る舞われたお酒を飲み、用意していただいた夕食を食べ尽くし、お土産をいただいて、キリチャンスキーさんから人生初の“西洋挨拶”を体験して、ホテルに帰った。

6日目 ウクライナに来て初めての青空を見ながら、消防局のコーリャさんの運転でキエフの空港に向かい、ウクライナを後にした。

7日目 ウクライナでは変に緊張していたせいか、フィンランドの首都ヘルシンキでは、何かが吹っ切れたように楽しく、ウクライナよりもたくさん写真を撮って、トランジットを満喫した。帰国後は時差ボケもなく、日常がすぐに戻ってきた。

今までは、書類等を読んでいても何のことが理解できなかった部分もありましたが、実際に現地へ行って活動している人たちに会って話す事で、事業内容が理解できるようになり、とても良い経験をさせてもらったとつくづく感じました。今回の派遣を通して、五感で感じたものをフルに活用してナロジチ復興のために活動していきたいと思うことができました。



〈右から 2 人目が山本さん〉

菜の花が変えるチェルノブイリの未来

動き始めた汚染地復興プロジェクト報告会

今や、マスコミからも熱い注目を受けている「菜の花プロジェクト」2年目の報告会を開催します。

現地側との呼吸が合わず、迷走しかけたプロジェクトも、11月の訪問で軌道修正をし、3年目に向けての方向性も打ち出すことができました。

このプロジェクトの敵は放射能だけでなく、ウクライナの旧態依然とした法律や行政も。これからも戦い続けます。（市原）

- 日時 12月13日（土）午後1時30分より
- 場所 ウィルあいち会議室4 /052-962-2511
（地下鉄「市役所」②出口 東へ徒歩10分）
- 参加費 無料
- 報告 〈救援・中部〉 原富男・河田昌東
- 現地映像上映 〈撮影 宮腰吉郎〉

*同封のチラシをご覧ください。



原さん「熊谷西高校(埼玉県)」で講演

（小牧 崇）

11月15日、伊那の二人（原・小牧）は朝早く車で埼玉県に向かった。

原さんの知人が役員をしている熊谷西高校PTAから、講演依頼が舞い込んだためである。埼玉と長野は隣接しているとはいっても、間に秩父山塊が居座っているため、片道200キロを超える長旅。行きは碓氷峠越で関東平野に下る。妙義山の紅葉が見事であった。

昼過ぎ、熊谷の町外れ、田園の中に建つ西高校に到着。生徒数千人の大規模校。クラブ活動が活発らしく、休日にもかかわらずグラウンドにも体育館にも練習に汗を流す生徒が溢れていた。会場は、真新しい合宿所2階のホールであった。三々五々集まった熱心なお母さんたちを相手に二時間、身近なごみ処理から始まって、救援中部の活動の歴史、メインの放射性物質の処理（つまりは「菜の花PJ」）について熱弁をふるった。終了後の質疑タイムにも次々質問が出ていたので、大いに関心を引いたようである。

帰りかけには役員のお母さんから「健康に気をつけ頑張ってください」とねぎらいの言葉いただき、熊谷名産菓子「五家宝」を手土産に帰途についた。帰りは夕闇迫る東京郊外をかすめて、中央道経由で伊那へ。

この日は、前回のスタツアに参加された富士見（長野県）の遠藤さんも、山梨県甲府で開かれた生協の集会で、菜の花PJの話をしている。今まで、比較的縁のなかった関東周辺地域へ、チェルノブイリの活動が一気に広がった(!?) 記念すべき一日であった。

なお、つい最近完成した「ナロジチ絵はがきセット(4枚組200円)」（12ページ参照）も、甲府で遠藤さんが100組完売！ 出足好調です。

「NGOの集い」を開催しました！ (神野美知江)

9月16日、昭和風のチェル救事務所に、NGO団体やNタマ研修生(なんと総勢16名!!)が集い、「若い人への呼びかけ方(多文化共生 smileの河村さん)」の勉強会を行いました。この勉強会は、名古屋NGOセンターの「NGO間の繋がりを深める」という企画に取り組んだ分科会から発生しています。

*チェル救にとって、まさに「目からうろこ」の勉強会となりました。スマイルの河村さんをはじめ、参加して下さった皆様に心から感謝いたします。



〈参加して下さった皆さん〉

参加した若い人に「どんな団体に魅力を感じますか?」と尋ねたところ…

1) 出会いがあり、「楽しそうだ」と思うこと。

呼びかけが重要なファクターで、いかに「楽しさを伝えるか」が大切。

2) 繋がりが消えないように「次回への誘い」をする。

活動の説明をして終わりではなく、「また来てね」ではなく、次回の約束をする。

3) 再来者に「話しかける」

受け入れられているということを感じてもらう。話しかける。なぜ来てくれたのか、関心のあることを聞き、「受け入れていますよ」というサインを送る。居づらさを感じさせないこと。

4) 受け入れ側に誰か一人、「若い人がいる」

再来した人を引き止め、さらに呼び水になる。その人を介して馴染みやすさがわく。客観的に伝えると、伝わりやすい。熱が入り過ぎると聴講者は引く。年齢層が違う人が入ると、違う年齢層の人が集まる。

5) 「具体的にできること、やってほしいことを提案する」

再来者が団体に求めていることや、団体がその人をお願いしたいことを具体化し、関わり方をわかりやすくする。「何をしてもらおうのか」や、「探している人材」を明確にする。

6) 「任せる」

再来者ができそうな範囲で、「役割を作り任せる」ことが重要。早めに責任者になり「必要な人材だ」と感じると「次も行こう」と思う。ペアになって、イベントを企画し「新鮮なアイデア」を出してもらう。団体の活動に馴染みが少ないだけ、新鮮なアイデアが出て吸収できる。

以上のような意見交換のあと、チェル救についての質問をしました。具体的には…

Q:「どうすれば“チェルノブイリ”に関心を持ってくれるの?」

A:過去の事実(歴史)より、具体的な現在の事や自分との関わりを知りたい。「同年代の人が今、どんな生活をしているのか?」や「実際どうなっているのか?」に関心がある。生まれてくる子どものことも知りたい。掲示してあるだけではなく、大学の授業やサークルに来て話してほしい。

Q:「学生サークルとの連絡の仕方は?」

A:HPにリンクを張ったり、ブログを書く。大学HPの「サークル紹介」にアクセスする。携帯メールは一斉に配受信され、情報を受け取れる。フリーペーパーやチラシも有効。自分が関心のある記事を見つけても、一人では行きにくい。誰かを誘って「一緒に行こう」という口コミや、ネット掲示板、個人を通じてサークル内に情報を広げることできる。「ボラみみ」やフリーペーパーなどを通して、団体の活動を紹介してもらう。世代の近い人が団体の詳しい説明をすると、身近に感じ「関わりやすい」と思う。

Q:「自分が参加しようと思う団体の選び方は?」

A:団体の人に魅力があり、自分を一人前に扱ってくれたこと。

Q:「力仕事を手伝ってくれる若い人が欲しい」

A:単に「力仕事をしてくれ」と言われても、バイトとしか思えない。仕事中心や休憩時に支援の意味や意義を理解できるように話して欲しい。食事や交通費があり、「何のために自分が必要か」が分かるように説明してくれれば、手伝えるかもしれない。ただ「手伝え」という呼びかけへの参加は難しい。

締め切り迫る！

ミルク&カードキャンペーン

今回でクリスマスカード・キャンペーンも18回目になります。このキャンペーンを担当し、皆様からの温かいカードを受け取る度に、その重要性和歴史を感じる毎日です。

さて、このキャンペーンをさらに広めていくため、先日行われたワールド・コラボ・フェスタの出展ブースでもクリスマスカード・キャンペーンを行いました。なんと2日間で80通近く!!! ブース内は終始、カードを書きに来てくださる方で賑わい、カードキャンペーンを説明するスタッフの声や笑い声も、一段と大きくなっていました。当日、カードを書きくださった皆様に心から感謝いたします。ありがとうございました。

実のところ私自身、2日間でこんなにもたくさんの方にカードを書いていただけるとは思っていなかったもので、本当に驚きでした。中には2日通して4回もカードを書きに来てくれた男の子も。最終日には友達のようになっていましたよ。私にとってワールド・コラボ・フェスタは、皆さんの温かいお気持ちが身にしみる2日間となりました。そしてつい先日、毎年ご支援をいただいている山里学童クラブさんにも、今年もクリスマスカード・キャンペーンでお邪魔しました。小学生の子ども達にチェルノブイリ原発事故とカードキャンペーンを知ってもらうために、紙芝居を引っさげて行ってまいりました！

しかし、私の作ったその紙芝居が申し訳ないくらい下手くそだったので、食い入るように紙芝居を見ている子ども達に申し訳なく思う一方、その真剣さに嬉しくもなりました。ひと通り紙芝居を読んだ後、カード作りへ…。子どもならではのかわいらしいカードが次々と出来上がっていく様子に、心から感動しました。色とりどりの折り紙やペンを使って飾り付けしたり、一生懸命ウクライナ語を書き写したりしているそのまなざしが、これからもこのキャンペーンを頑張っていこうというエネルギーにもなりました。カードを書きに来てくれた子ども達が、何年後かこのキャンペーンを思い出し、自分が書いた1枚のカードの重みを感じてくれたらいいなと純粋に思いました。

また近頃では、事務局にもたくさん温かいカードや折り紙が送られて来ます。事務局に行くごとに、私の机の上には届いたばかりの素敵なカードや折り紙が！ 最近ではそれを楽しみに事務局へ向うようになっていきます。本当に嬉しい限りです。皆さんの温かいお気持ちを確実にウクライナの病院や孤児院に届けるため、これからも頑張っていく次第です。

締め切りの12月14日まであとわずかですが、まだまだカードを募集しておりますので、ご協力をお願いいたします。 発送作業は12月15日(月)・17日(水)朝10:00~から、事務局にて行います。もしお時間ございましたら、ご協力ください！ あまり広いとはいえない事務所ですが、当団体一同、皆様のご協力をお待ちしております。よろしくお願いたします。 (黒瀬愛見)

余談ですが、チェルノブイリ救援・中部事務局のブログを開設いたしました！

実際に事務局って何をしているの？ どんな人がいるの？ っと、疑問をお持ちの方もみえるでしょう。そんな疑問に答えるべく、インターン生(研修生)の目線で、当団体事務局の日常をお伝えしていこうと考えています。また、このブログが支援してくださっている皆様と事務局との交流の場になればいいな、とも思っております。なので、ちょっとしたコメントをいただければ幸いです。ご存知の方もおみえかとは思いますが、事務局員は見事に個性派ぞろいです。事務局の一風変わった人々をちょっとずつ紹介していきます。お楽しみに!!! ブログアドレス <http://blog.goo.ne.jp/chq/>



<ワールド・コラボ・フェスタにて>

♪クリスマスカード作りワークショップ in ワールド・コラボ・フェスタ 2008♪

10月25日～26日に、栄の「もちのき広場」で開催された“ワールド・コラボ・フェスタ 2008”にブース出展しました。初日は天候にも恵まれ、多くのお客さんがイベントに集まりました。毎年ブースの位置が違うということで、今年は「オアシス 21」と「もちのき広場」を結ぶ通り道あたりで、ブースをかりることができました。

今回は、8月から3回にわたって、名古屋 NGO センター主催の“魅力的なブース作り講座”に参加していたこともあり、インターン生の黒瀬さんのアイデアによって、ひときわ目立つブースを出展でき、多くのお客さんが足を止めてブースを訪れてくれました!! 団体の活動紹介を説明すると、子どもから大人の方まで「自分の書いたカードを現地に送って、少しでも元気になってほしい!」と、チェルノブイリの子どもたちに向けて、それぞれ思い思いにクリスマスカードにメッセージを書いていってくれました。また、現地の子ども達からのお返事が届きます!とお話したら参加者は「えっ!ほんと!? うれしい」と、とても喜んでくれました。

今回は、会場内の別の場所でワークショップの時間を設けていたので、黒瀬さんはチェルノブイリの現状を10人ほどの前で説明しながらカードを作ってもらっていました。

クリスマスカードを受け取ったチェルノブイリの子ども達が見て、「チェルノブイリで起こった事故のことをまだ忘れないでいてくれるんだ!」と元気になってくれればと思います。(山本)



<万国旗のように、ブースを埋めつくしたクリスマスカード>

「ボラみ展 in 愛知淑徳大学 CCC」にブース出展参加 (戸村 京子)

10月5日に、愛知淑徳大学星が丘キャンパスで「ボラみ展」(NPO 法人ボラみみより情報局主催/愛知淑徳大学 CCC 協力)が行われ、チェル救もブース出展で参加しました。

このイベントは「ボランティアをしたい人とボランティアを求める団体をつなぐ」ことを目的に開催されました。福祉・環境保護・まちづくり・国際協力・災害救援など、さまざまな分野の NPO/NGO 約 30 団体が、活動のパネル展示やボランティア体験の場を用意し、参加者にアピールしました。また、団体同士も、情報交換したり交流する絶好の機会となりました。

チェル救は、現在インターン(Nたま)で活動している黒瀬さんと事務局山本さんを中心に8人が参加し、『菜の花プロジェクト』のパネル展示の他、ウクライナの被災者へ贈る「カードキャンペーン」のクリスマスカード作りを呼びかけました。今年の「カード・キャンペーン」のスタートの場として、参加者の心のこもったカード30通が製作されました。また、会場では各種ボランティア講座も開催され、「ボランティアきっかけ講座」、特別講座「CSR(企業の社会的責任)とボランティア」などがあり、チェル救からも「ボランティア受入マネジメント講座」に参加し、ボランティアの受入について学びました。その他にも、手話・点字体験、視覚障害者のガイドヘルプ歩行体験等の福祉体験コーナーや、自然食のお弁当、フェアトレードのコーヒー、共同購入会の牛乳・ヨーグルトの試飲試食、チャリティ・ミニコンサートなどがあり、多彩な内容でした。

多くのボランティア・スタッフが企画段階から参加し、淑徳大学の学生ボランティアたちは若い力とセンスを発揮して、イベントを楽しく盛り上げていました。このイベントをきっかけに、幅広い年代から「ボランティアを始めたい」「自分のやりたい事が見つかった」などの声が聞かれました。

「思い出のステファニ・レナトさん～没後5年を迎えて」に参加して

9月28日、なごや国際センターで、長く日本でNGO活動を続けられ、支援先の東チモールで道半ばに亡くなられた、ステファニ・レナトさんを偲ぶ会が開かれました。

没後5年を迎えたのですが、会場にはステファニさんの活動を記録したビデオ映像が流れ、多くの人びとと写る写真とともに、今も世界各地でNGO活動を行う人々に、笑顔で多くのことを語りかけているようでした。日本各地から参集した人びとから、ステファニさんの思い出話やエピソードなどが語られました。また、その場を借りてそれぞれの活動報告もなされ、ステファニさんの志を引き継いでいこうと互いに励まし合いました。ステファニさんはイタリア人の神父さんでしたが、多方面のNGO活動に携われ、さらに各NGOをつなぐために、現在の名古屋NGOセンターの前身・第3世界ショップや、その後名古屋NGOセンターの設立に尽力されました。

なお、チェルノブイリ救援・中部は、2006年に第3回ステファニ・レナト賞を受賞しました。（戸村）



平成19年 国際ボランティア貯金に係わる寄附金による援助事業の完了報告書提出

昨年6月助成申請が決定し、今年6月に終了予定だった「平成19年度国際ボランティア貯金に係わる寄附金の配分」による事業は、当初計画より3ヶ月遅れて終了しました。既に、ポーシェでお伝えしましたように、ナロジチに搬入するBDF装置について、ウクライナ内閣付属人道問題支援委員会の許可がなかなかおりなかったり、装置設置場所の改修工事許認可申請の進捗が遅れたり…と、トラブル続きで、このような結果となりました。

今回の助成は、大きく分けて①バイオガスプラント設置費 ②BDFプラント設置費 ③日本人専門家・スタッフ派遣費 ④通訳滞在費 の4項目にわたっています。しかし、残念ながら進捗の遅れにより、原さん・宮腰さんが当初計画にはなかった現地訪問を行い、ナロジチ現地の状況を打開すべく働きましたが、BDFプラント設置までの進捗となり、①のバイオガスプラント設置は見送らざるを得なくなってしまいました。従って、ボランティア貯金寄附金からの配分(当初1,677万円)の内、返還金が発生することになります。

現時点で、ゆう貯財団国際ボランティア貯金センターの方と、提出した完了報告書についてのやり取りを行っており、正式な配分決定と返還額決定については、今後に持ち越されます。（山盛）

愛知県国際交流協会「国際貢献事業助成金」申請変更について

今年6月、愛知県国際交流協会に「国際貢献支援事業助成金」を申請し、助成が決定されたことは、既にポーシェの記事でお伝えしました。これはナロジチ地区中央病院に対する支援（**心臓超音波検査器と脳超音波検査器の提供**）のための申請でした。しかし、8月、ナロジチ地区病院より心臓超音波検査器が6倍以上値上がりしたため、購入不可能になったとのことで、「**呼吸器運動記録器**」に変更したい旨、連絡が入りました。そこで、当国際交流協会に変更申請するにあたっては、変更に至った理由、新しい機器が必要な理由、また止むを得ない事情について、詳細説明が必要であることをナロジチ地区病院に伝えました。

9月に入り、ナロジチ地区中央病院院長から変更事由の説明書が2度にわたって届きました。ひとつは、医療機器の価格が常時上昇し、心臓超音波検査器は9月に入り申請当初の7.5倍になったとの説明書。そして、「～当地区では、近年、児童においても、成人においても、呼吸器疾患の罹病率が増加しています。特に、慢性気管支炎・気管支喘息・肺炎などです。正しい治療を指示し、その後治療に改善を加えていくためには、治療の過程で何度も患者を検査する必要があります。患者達は、検査のたびに、140kmも離れた州都に行くことができません。当院が呼吸器記録器を入手できれば、医師達はチェルノブイリ原発事故の被災者である患者達に、より質の高い治療を施せるようになり、その結果、余病併発や障害の発生を減らすことが可能となります。ナロジチ地区中央病院院長 V.V.グリシコーヴェツ」との説明書が届きました。

その後、事務局では変更申請を愛知県国際交流協会に提出。11月5日付けで、変更が認められました。さっそく、「呼吸器運動記録器」の購入など、具体的な支援の手続きをスタートしています。（山盛）

次世代に引き継がれるチェルノブイリ後遺症

22年前のチェルノブイリ原発事故で多くの人々が被曝した。事故処理作業者は勿論、緊急避難した人々、いまだに汚染地域に住みつづける人々など、数知れない。しかし、被曝による被害者はそれだけではない。放射能を浴びた（あるいは今も浴びつづけている）母親から生まれた子ども達もその被害者である。グリーンピースによる報告（2006年）からいくつかの事例を紹介する。

●話にならない国連報告

チェルノブイリ事故20年目にあたり、WHO（世界保健機構：国連の機関）は最終報告書を出した。それは全く話にならない内容である。例えば、チェルノブイリの被曝に直接関係あると判断される死者は、2005年までにたった50人。その殆どは事故処理作業者であるという。また、今後も含めて予想される全てのチェルノブイリ関連の死者は、4,000人に過ぎない、といった内容である。これでは、チェルノブイリ事故の幕引きをしようとする意図が丸見えである。

●グリーンピース報告 2006

グリーンピースの専門家らはこれに対し、ウクライナ・ベラルーシ・ロシアの専門家52名により、これまで3国で出版された論文約400篇をまとめ、「チェルノブイリ事故の人間の健康への影響」と題する137ページに及ぶ総説を発表した。その中から一部を紹介する。

(<http://www.greenpeace.org/international/press/reports/chernobylhealthreport>)

●「泌尿生殖器系への影響」から

汚染地域住民の女性の体内に入った放射能は、女性自身やその子ども達に様々な影響をもたらした。妊娠中に被曝した女性から生まれた子どもには、統計的に有意な性器の異常や性器の発達障害が多数見られ、汚染レベルと相関があったという。発達異常は、事故後に生まれた女の子で通常の5倍、男の子で3倍に上る。2002年に書かれた論文によれば、1キュリー/Km²以上の汚染地域に住む妊婦1,026,046人の調査の結果、産婦人科関連の病気に罹った人数は、非汚染地域のそれと比べて明らかに高

く、時期によっては、非汚染地域の5.5倍にもなった。ウクライナの汚染地域では、住民の膀胱の前がん症状が倍増した。これは低レベル放射能汚染と関連づけられている。

●胎盤に侵入した放射能

セシウム137やストロンチウム90は、胎盤に蓄積し、胎盤の血流障害をもたらした。胎盤の発達が阻害された結果、胎児の発達に異常を来たし、未熟児や先天異常児が多数生まれることになった。汚染地域の出産異常は78.2%にも及び、という報告もある。最も多かったのは、仮死状態での出生と呼吸器系の異常で自力呼吸できない赤ちゃんだった。事故前と比べると5~9倍に増加した。

放射能は胎盤からさらに子宮内部に入り、胎児に直接的影響も与えた。汚染地域では、新生児の消化器系の発達障害が増加した。胸腺や骨髄など、免疫系の発達に異常をきたす新生児の割合は、被曝レベルと相関があった。その結果、被曝した母親から生まれた子どもは病気にかかりやすく、場所によっては健康な子どもは9%しかいないところもあるという。子どもの体内で、最も放射能が蓄積するのは、骨である。それはストロンチウム90が、骨を作るカルシウムに化学的性質が似ているためである。汚染地域の母親から生まれた子どもの肋骨や背骨や歯には、多量の放射能が蓄積し、骨の発達にも異常があるという。幼年時代に被曝した女性の妊娠率も大幅に低下し、多量に被曝した場合12.5%まで低下した。

これら全てのデータは、チェルノブイリの影響が次世代にまで引き継がれることを示している。（河田）

竹内さんのウクライナ便り

11月中旬、キエフの街路樹はすっかり黄葉し、落葉が歩道に散らばっています。世界的金融危機はウクライナ経済にも大きな影響を与えており、今年、市内の両替所でのドル相場はおよそ1ドル=4.8グリヴナ前後で推移していたのが、10月末には一時1ドル=7グリヴナを超えるという事態が発生。国立銀行は5億ドルを放出してグリヴナの安定を図るという措置を取り、現時点では1ドル=5.80グリヴナ前後で推移しているようです。ウクライナのある大手建設会社は、2007年前半期に10億ドル以上の利益を上げていたのに比べ、今年の同期には7670万ドルの損失を被っており、従業員の30%を解雇すると発表。また、業界3位の自動車工場は、生産量を5割削減。無給休暇に追い込まれたウクライナ東部の冶金工業の従業員らは、ロシアへの出稼ぎを余儀なくされている…などの報道がマスコミを賑わせています。

財政状態改善のためウクライナがIMFから165億ドルの融資を受けるという件は、日本でも報道されたと思いますが、10月29日、最高会議ではその条件を整えるため、最低賃金を2年間凍結するなどの施策を含む一連の法案を採決。10月8日、ユシェンコ大統領は最高会議解散・選挙を宣言、当初は12月7日という投票日が予定されていました。しかし、「ティモシェンコ・ブロック」による最高会議の議長席封鎖で、選挙のための追加予算に関する法案の審議が進まず、この日程が危うくなってきたところで、上記のIMF融資問題が緊急となり、「我らのウクライナ+国民自衛」と「ティモシェンコ・ブロック」の妥協が成立。選挙予算に関する法案の審議が一時棚上げされた後、11月11日になって、大統領は選挙の期日を2009年に先送りし、2009年度の国家予算に選挙関連費用を盛り込むという考えを示しました。

11月12日には、やはり大統領のイニシアティブで、経済危機対策国会議なるものが開かれることになっており、それには最高会議議長・最高会議の各派閥の長・首相及び主要省庁



<秋蒔きのナタネ畑を視察(11月4日)>

の大臣・各州の行政長ほか地方自治体の長・大企業の代表者・学者・金融経済問題の専門家らが出席するのだそうです。

しかし、「この間ウクライナの政界は内輪の権力争いにうつつを抜かしており、無為無策の悪しき結果がすでに現れている」というのが世論の大勢で、「国際経済危機なんて気にならない？ガスの価格がいくらになろうが関係ない？グリヴナの相場なんかどうでもいい？じゃ、あなたはユシェンコさんですね！」、あるいは「[大統領府長官]バローガがユシェンコに言う。『経済危機の折柄、コンサートや記念碑などの経費は削減すべきだとの意見もありますが…』それは間違いというもの。ウクライナ経済の初七日や四十九日〔原文では正教の慣例により『初九日や四十日』〕の儀式は盛大に執り行わなければならない』といった小話が雑誌に出ています。「ウクライナ経済が好況を謳歌していた間、政治家たちは選挙のたびに国民に最低賃金・年金値上げを約束するという場当たりの票稼ぎ政策をとってきた。しかしそれは誤りで、税金をインフラの改善（企業の生産設備更新・省エネ促進など）に使うべきであった。実際にはそうはならず、ウクライナは先進国に原料や半製品を提供する役割しか果たしてこなかった。IMFからの融資も、結局は政界と癒着した一部企業の延命策に用いられるだけではないか？」という論評もありました。

今年の9月時点で、ウクライナの対外債務は1,000億ドルに及んでおり、2009年の貿易赤字は250億ドルになるだろうとの見通しがすでにあつた由。 (11月12日)

収入の部			支出の部		
項	目	金額(円)	項	目	金額(円)
寄付金		2,273,643	事業費		23,622,675
個人	一般	1,397,711	医療機関支援事業費	606,000	
	ミルク	128,000	医療機器提供事業	606,000	
	奨学金	22,000	医薬品提供事業	0	
	維持会員費	193,000	保健事業費	800,000	
	その他	17,932	粉ミルク提供事業	800,000	
団体		515,000	被災者団体等支援事業	1,100,000	
菜の花プロジェクト寄付金		414,393	業務委託費	501,170	
ボランティア貯金助成金		16,329,000	奨学金事業費	0	
地方公共団体交付金		0	特別事業費	20,218,855	
民間助成金		0	派遣事業費	0	
雑収入		37,430	駐在員費	0	
受取利息		22,395	支援輸送費	0	
			文通・クリスマスカード事業費	2,070	
			海外監査費	0	
			通信誌発行費用	394,580	
			国内監査費	0	
			キャンペーン	0	
			イベント関連費	0	
			管理費	1,396,085	
			給料手当	708,500	
			荷造運賃	0	
			印刷製本費	0	
			旅費交通費	136,229	
			会議費	14,000	
			通信費	88,312	
			消耗品費	45,517	
			修繕費	0	
			水道光熱費	10,886	
			支払手数料	38,010	
			為替差損	0	
			諸謝金	10,000	
			諸会費	40,080	
			新聞図書費	0	
			租税公課	0	
			地代家賃	258,977	
			雑費	45,574	
当期収入合計		19,076,861	当期支出合計	25,018,760	
			当期収支差額	▲ 5,941,899	
前期繰越収支差額		19,325,210	次期繰越収支差額	13,383,311	
収入総額		38,402,071	支出総額	38,402,071	

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

平成 20年 11月 17日

監査人 **神野 美知江**

当期収支差額（当期収入合計－当期支出合計）が、▲5,941,899円となっています。これはボランティア貯金の交付金入金と当該事業支出金の発生が、期をまたいでずれた事によるものです。

次期繰越金（13,383,311円）は、当面の事業に支障を来たすレベルではありませんが、更に活動基盤を強固にするため、皆様のご寄付・ご協力をよろしくお願いします。

事務局便り

今から「今年を振り返ってみると…」と語るのは早尚な気もするが、つい口をついて出てしまう。いやはや、なんととも慌しい一年だった。年頭の事務局便りに、私は「楽観主義と明日への希望」という言葉を残されて旅立った故タビノヴァさんのことと、正念場を迎える菜の花PJについて書いた。そこに「何が起きるかわからないウクライナ。待ち受けているのはいくつものハードルか。現地との深い共通理解——」と。予言!?的中の一年だった。(山盛)

「絵はがきセット」は いかが？

ナロジチ…風下の村 (200 円/4 枚組)

ナロジチはチェルノブイリから南西に約 70 km。原発事故によって深刻な被害を被ったウクライナの農村地帯です。現在 1 万人の人々が此処で生活していますが、当時降りそそいだ放射能の多くはまだ残存しています。私たちは菜の花の働きを利用して土壌を浄化しバイオエネルギーによる復興を目指す取り組みを始めました。

皆さまのご支援をお願いいたします。

【**知ってください**】のリーフレットが新しくなりました。
ご希望の方は、事務局までご連絡ください。



編集後記

☆長年 TBS「ニュース 23」を見てから寝る習慣だ。ついに筑紫哲也さんは戻らなかった。彼は社会の座標軸、羅針盤と評されたが、社会情勢の変化、人権、戦争・平和問題などの折々、「こんな時、彼なら何と発言するのか」と気になるのだ。これからも「彼なら？」と、この不確実な世の中を考えていこう。(京)

☆「嬉しい悲しいは分かるけど、楽しいが分からない。どういう時が楽しいということですか？」…聞かれて困惑した。この頃、物騒な世の中だということで、集団で遊んでいる子どもを見かけない。集団生活を通して感情表現が育まれるのに…。すでに不思議な日本人が育っている。(美)

☆「ガラスの仮面」がいよいよ最終幕に向かって連載を再開した。30 年以上前に連載がスタートしたとき、私は北島マヤと同じ中学生だった。なのになぜ彼女だけ、まだ 20 代？(佳)

☆国際金融危機が、いよいよ日本の実体経済にも深刻な影響を与え始めた。これは、米国の従属国として、デリバティブというマネーゲームに引きずり込まれ、甘い汁を吸ったしっぺ返しだと言えなくもない。圧倒的な市民の支持を得て当選したオバマ新大統領の背後にも、引き続き、国際金融資本家達が絶大なる影響力を持って君臨している。NGO(市民)が自分達の社会を取り戻すためには、まず「米国の中央銀行と呼ばれる FRB(連邦準備制度理事会)が、彼らの私的所有物である」というからくり気づくことから始めなければならない。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473